

共通に、① 或る状況 (casus) を設定し、② 命題の語の意味を規定すること (institutio) に基づいて成立するものであることに着目し、討論における拘束に関する理論によって、嘘つきのパラドックスを解決しようとする。すなわち、嘘つきのパラドックスは、① ソクラテスは「ソクラテスは偽を言う」とだけ発言し、それ以外の命題を述べないという状況設定において、② 語が通常の意味表示を行ない、「偽」が「ソクラテスは偽を言う」と言う命題全体を言及する場合に生ずる。しかし、Heytesburyによれば、〈状況設定は不可能なこと、すなわち矛盾を含まない限りにおいてのみ認められるべきである〉という討論における拘束に関する規則によって、状況設定①は拒否される。状況設定①は、同一の命題が同時に真であり、且つ偽であることを含意するからである。

以上、紹介した論文はいずれも論点が明快であり、中世論理学を研究する者に極めて大きな示唆を与えてくれる。更に本書と同様に、討論における拘束に関する理論について論じているものとしては、Hajo Keffer, *De Obligationibus*, Rekonstruktion einer spätmittelalterlichen Disputationstheorie, Brill, 2001 が挙げられる。

注

- 1) 拙著『オッカム「大論理学」註解 V』付録、嘘つきのパラドックスとオッカム、創文社、2003 を参照。

Jean-Michel FONTANIER

La Beauté selon Saint Augustin

Presses Universitaires de Rennes, 1998, pp.200

樋 笠 勝 士

アウグスティヌス哲学の研究において「美」を主題とする研究は思いの外多い。古くは Svoboda の著作があり、最近では Harrison があつた。このような研究の視座

は、もちろんアウグスティヌスの初期著作『美と適合について』を高く見積もることに由来するところもあるが、しかし、それだけではない。例えば『告白』第十巻では、外から内へと神の探求が進み、記憶の領域を探りながら、その探求の高みに達したときに彼が呼びかける相手は「古くて新しき美」である。「あなた」が「美」として現れているのである。この事実は、アウグスティヌスが「美」という価値に対して特別な立場に立っていることを示している。その上、その他の著作においても重要な場面で「美」が語られることも多々あり、その意味では「アウグスティヌスの美学」の構築は既に十分可能なのである（実際タルケヴィッチは『美学史』で構築している）。

さて、著者が本書において明らかにしようとするのはアウグスティヌスの「美学 (esthétique)」ではなく「美の理論 (théorie du beau)」である。この論究の方向性についての理由は二つある。第一にアウグスティヌスにおける美の反省は存在論に属している。美は決して過ぎ去る事物の調和ではなく「存在 (l'Être)」そのものである。第二に、アウグスティヌスは美の反省において藝術を自律的に扱っていない。美は藝術の媒介を必要としているわけではないのである。従ってアウグスティヌスにとって自然と藝術の対立は意味をなさないのである。このような問題意識に基づいて、著者は大きな問いをたてる。それは、*quid est pulchritudo?* という問いである。

この問いに答えるべく、本書は次のように構成されている。序論、第一章 素描と展望：散佚した『美と適合について』の論考、第二章 諸々の用語：*species*, *forma*, *decor-decus*, 第三章 物的な事物の美の諸定義、そして特に身体の美の定義、第四章 物体の美と魂の美、第五章 神の美、第六章 キリストの美、第七章 美への愛、結論。

以上の構成から、本書が美の位相差を体系化し、美の問題を位階的に捉え、超越の問題に結びつけていることがわかる。それを簡単に見ていこう。

『美と適合について』においては、この著作の淵源が問われる。マニ教、『大ヒピアス』、ケクロなどの影響や比較の議論を通じて確認されるのは *coaptatio* という調和の概念である。アウグスティヌスの美の反省は調和の美から始まるのである。

次に著者は美の客観的な基準を表す用語を検討する。*species* と *forma* の相互互換的な用語法の指摘の後、シノニムであっても無差別な用語法ではないとして、*species* において *pulchritudo* の発現様態を見だし、*forma* には幾何学的な姿形を強調する。また、*decor-decus* においては、被造物同士の「外的な調和」である

aptum に対して、対象の「内的適合」の概念が示される。

さて、以上の準備段階の考察の後「物的な事物の美の定義」を語る箇所の考察が始まる。それは影響史的なアプローチである。先ず *coaptatio* や *congruentia* の概念に対応するピタゴラス的なハルモニアの概念についての検討を出発点とする。そして『音楽論』第六巻の *aequalitas* の概念において、著者は、韻律上の数的比率の等しさが物体の比率の等しさに類比的に適用される議論の可能性を示す。ここから、すべての「等しさ」と数的調和の基準である「一性 (*unitéj*)」の検討へと進む。この「一性・統一性」は、単純な「一性」と複合的な「一性」とに分けられ、それを著者は『秩序論』第二巻における *discernere-conectere* の対比を通じて、プラトン『パイロス』などを援用しつつ、その対比が「一性」に支えられる限りでの物体の美を理解するための対比概念であることを明らかにする。著者は、このような「一性」の概念の根本性に基づいて、改めて *unitas* と *forma* の関係において問い直し、*integritas*, *speciosum*, *forma corporis* という用語の分析を通じて、*unitas* の概念の存在論的優位性が確認される。更に、著者は、アウグスティヌスが感性的な美に「一性」を見いだす伝統的な立場を示しながらも、他方でアウグスティヌスが自分の立場に対しても批判的でもあり、「一性」が常に被造物の「非一性」を通じて美として現れるという美の発現形態を思索している点をも指摘する。

著者は、次に物体の美・感性的な美から、より優れた精神的な美へと考察を進め、「魂の美」の根拠として *imago Dei* を論ずる。アンブロシウスとの比較によって、アウグスティヌスが「魂の美」と「*imago Dei* に向けられた魂の存在」とを同一視していることを明確にする。それは、回心の動機となる *displacentia sui* をもつ魂であり、その限りでの美である。そしてこの美を構成するのは、内的には魂に *ordo* をもたらす「一性」であり、外的には魂と物体及び魂と神の関係における *ordo* なのである。この結果、はたして人間とは魂のことであるか否かが問われることになり、プラトンの伝統との異同が論じられる。そこで、魂と身体の調和的な関係は数学的な *symmetria* ではなく婚姻関係の形式をとることが示される。

アウグスティヌスはプラトンの *théo-kalique* の伝統の中にある。『告白』はそれを全体的に物語る書である。被造物が存在し美しいのは、結局神が存在し美しい限りにおいてである。ここで、神の美の場合の問題は、存在と属性、実体と性質の関係ではなく、神の *simplicitas* において捉えられなければならないことがプロティノ

スとの比較によって論じられる。そして、そのような「(美しい) 神を観る」ことを求める philokalique な精神は、一者・神の輝きである「御子の species (美)」に探求の中心を見いだす神学的な美学をつくりだすのである。その美学は御子の受肉を美 (pulchritudo : *Enarr. in Ps*, 44, 3) とする調和の美学である。つまりキリストの美は、決して、神の顕現や光輝の問題ではなく、神的本性と人間的本性との間のパラドクシカルで完全なる coaptatio の問題であり、イエスの死と人間の贖いの調和の問題であり、キリストの全体的統合性の問題なのである。

著者には「美とは何か」の問いに付随して「愛は常に美に対する愛であるか」という一貫した問いがある。プラトンのこの問いをめぐってアウグスティヌスにおける misokalie (『法律』689 a) の可能性をキリスト教的クリシェの立場から検討する。美は危険である。しかし確かに誰も醜を愛さない。この時、醜は存在するだろうか。そこでアウグスティヌスの美的オプティミズムは醜を中立化するのである。アウグスティヌスの美の哲学は言わばシンプルである。それは、solo Deo fruendum という命法である。『告白』十巻の「古くて新しき美」への切望は、地上的な美的快への差し控えと表裏一体なすものとしての「美への愛」なのである。

以上のような概観に対して、評者の限られた能力の範囲内で見解を述べることにしたい。フォンタニエ氏は、例えば結論で、「美」を構成する二つの主要概念として「一性」と「形相」を挙げ、その相互内包性を指摘する。更に存在論的には優位な「一性」に対して、その表現としての「形相」を美に近づけて考える。なぜなら、「形相」は「一性」の数的展開 (ハルモニア) であり、その唯一の表現だからである。このような議論は、ピタゴラス的文脈やプロティノスとの比較において為される。加えて多様な教父の引用もあり有益ではあるものの、アウグスティヌスの議論を一種のトポスとして扱い、その次元で他の文献との関係を探る仕方は、影響史的な視点と同時に比較思想的な視点へと展開している。確かに著者のその視点や関係づけはユニークなところもあり注目に値すると言えよう。しかし、それは逆の見方をすればテキストの内在的な解釈が希薄になるということでもある。

また、「美」に関するアウグスティヌスの参照箇所は、目配りが効いているように見えるが、初期著作 (『美と適合について』『音楽論』『秩序論』) を解釈の出発点にしているためか、主張も最後までハルモニア論や「数」への言及が持続し、聖書解釈との関連や中後期著作の独自性やその連関が結果として控えめになっているようである。

この点についてはもう少し言及がほしいものである。

さて、評者が最も関心を寄せたのは、著者の oxymoron への言及である。修辭的表現として見過ごすこともあり、またアウグスティヌスの思想を象徴的に言い表すものとして単純に総括的に理解しがちな時もあるが、著者はそれを「美の理論」構築の潜在的な基盤に据えているようである。美の観照における *invisibilis visio*, *deformis forma* における美の二重性、キリスト論で *coaptatio* を考察する機縁となった *infans Rex* などである。教会の歌声の美しさに感動しつつ、それを差し控える慎みの状況は、まさに *similitudo dissimilis* という人間的状況を示すものである。そこにアウグスティヌスの美の反省の特徴があるとすれば、著者が結論づけるように、美を強く愛求しつつ、時に *misokalie* をも引き込む人間の根本的な境位が「美の理論」として現れてくるという見方に対して共感できる部分は確かにあるのである。

尚、J.-M. フォンタニエ氏は、レンヌ大学のラテン語ラテン文学の教授である。ヴェルギリウス研究やラテン語哲学用語集の編集などの活動の他、アウグスティヌス専門書としては、*Lectures des Confessions de Saint Augustin*, Rennes, Presses Univ., 1999 がある。

渋谷 克美 著『オッカム『大論理学』の研究』

創文社、1997 年、xiv+379 頁

清水 哲 郎

著者は日本における数少ないオッカム研究者のひとりとして、長年に亘って研究を積み上げて来、スコトゥスについての研究や、ウッダムのアダムについての翻訳など、オッカム前後のイギリス系フランシスコ会修道士の思想状況にも目を配りつつ、オッカム『論理学大全 *summa logicae*』（邦訳では『大論理学』）を中心とした業績を上げている。本書は著者の 80 年代後半から 90 年代前半に発表した業績を基にし、それ以前の論文の内容を随所に織り込みながら、編成されたものである。

全体は 4 章から成り、オッカムの〈概念〉理解のオッカム自身における変遷（第 1